

場所の意味と環境保全活動

田 口 誠

1. はじめに

ある地理的領域の自然保全を実現する際に目標をどのように定めるかという問題は、単にその場所が個人や集団に提供する表面的な機能上の便益と費用のみを比較して保全か開発かを選択するという構造であるべきではない。自然には道具的価値としての経済価値を超えて多様な価値が含まれる。地域の発展については様々な言説があり、農業主義 (agriruralist)、快楽主義 (hedonist)、功利主義 (utilitarian)、コミュニティの持続可能性 (community sustainability)、自然保全 (nature conservation) など、潜在的に場所の異なる側面を優先した発展形態があり得る (Elands and Wiersum (2001))。また、自然を多く含む地域の保護を検討する場合、場所における審美的経験とエコロジー保護は必ずしも両立するとは限らず、両者がコンフリクトを起こす事例があることも明らかにされてきた。現状では一般的に風景の審美的特性がエコロジー上の重要性よりも高く評価される傾向があるとの指摘がある (Gobster et al. (2007))。Gobster et al. (2007) では、このような傾向が存在する場合、審美価値を追求することでエコロジーの側面では状態を悪化させる可能性があるため、2つの側面を相互補完させるエコロジー審美 (ecological aesthetic) を目標とすることが望ましいとしている。多面的な価値のうちどの側面を重視した保護を実施するかについては、ヘッチヘッチー論争をはじめとして、保存と保全の軸をめぐる対立してきた事例が過去に数多く存在しているが、保全に限定した場合においてもさらに様々な形態がありうることを認識する必要がある。

本稿において分析の対象として想定するのは、原生自然や絶滅危惧種が生息する地域の保存、あるいは生物多様性が特に高い保護地区など、人と自然が区分された特別な地域における自然の保存ではなく、都市空間を含む日常的に人と自然が共生する場所の保全である。さらに、ここでは自然の持つ多面的価値や内在的価値に焦点を当てて保護活動のあり方について検討することを目的とする。特に場所としての自然に注目し、場所が人に対して与える意味、およびその分析方法について考察したい。日常の自然は継続した生活の場であり、このような自然の場の保護は、領域を囲い込んで周辺と切り離して保護する国立公園の設置や自然保護区における保存活動とは大きく性質を異にしている。日常の自然においては、人と場所のつながり (person-place bond) を基礎にして考察する必要がある。このような人と場所のつな

がりは、自然保護活動への意識や行動に影響を持つとされている。

人と場所のつながりが自然保護に与える効果には、保護を促進するケースと抑制するケースの両方がある。ある場所における居住や活動は、場所を基礎とするグループ・アイデンティティの形成につながり、これが環境保護運動をはじめとする集団行動 (collective action) を促進させる要素となりうるとの指摘がある。Cheng, Kruger and Daniels (2003) では、林業従事者や環境保護活動家などの立場の相違によって森林保護に対する見解は異なるが、場所ベースのグループ・アイデンティティを共有することで契約や法律に依存せずに森林保護の合意案に至る可能性があることを示唆している。一方で、グループ・アイデンティティによって偏狭や非合理的な考えにもとづいて発展的な変化への抵抗が起こる懸念もある。公有地や共有地における環境保全の実施については、様々な土地利用を望む利害関係者が存在する中で最終的に土地利用をひとつの用途に決定する必要があるため、合意形成に向けた場所ベースのグループ・アイデンティティの果たす役割は大きいと考えられる。

また、別の側面として、近年の経済発展やグローバル化は人と場所とのつながりに影響を与えてきた。地域と密着した関係のもとに成り立つ第1次産業の占める割合の低下、開発による地域の急速な変化、グローバル化にともなう場所の標準化や没個性化、人の流動性の高まりによって、一般的には人と場所との結びつきが希薄になったとされているが、場所をめぐる先行研究によると、このような社会の変化は必ずしも近年における場所の意義の低下につながっていない。場所の喪失 (displacement) が生じることで、かえって場所の重要性に関する認識や場所の意義が高まっているとの主張がある。再生可能エネルギーに関わる施設の設置にともない、過去に蓄積されてきた場所のアイデンティティの喪失が原因となる場所の保全行動に注目したDevine-Wright (2009) の研究では、設備の設置がグローバルな気候変動問題の解決に寄与する一方でローカルな場所の印象を悪化させる可能性を指摘している。ここでは場所へのアタッチメントが場所の喪失に対する態度やNIMBYismに影響を与える要素となっている。開発によって場所のローカルな特質が弱められる、場所にネガティブなレッテルを付与する、場所の時間的継続性が損なわれると予想される場合、結果として場所の感覚的な質の変化および自己効力感への脅威が発生して人々の自尊心を低下させる。これが心理的要素および文脈的要素と相まってNIMBYismをはじめとする場所の保護活動につながると主張されている。

このように、特定の場所の保護に対する個人の見解は、場所の持つ属性や、場所における特定の活動内容といった客観的特性に限らず、個人が経験や記憶にもとづいてその場所に対して一定の期間にわたって付与してきた心理的、文脈的要素の影響を受ける。特に文脈的要素については対象となる場所や個人によって多様であることが予想され、尺度を用いた実証分析では把握できない側面がある。これらの要素は場所の用途や保護の必要性に対する個人

の見解に影響を与えるため、場所の意味 (place meaning) の概念をもとにして様々な事例を扱った研究の動向を探り、人と場所のつながりと場所の保全活動の関係性について考察することがひとつの有効な手段となり得る。

2. 場所と諸概念

2.1 場所へのアプローチ

場所は空間 (space) とは異なる概念であり、文脈や価値をもとに認識される範囲である (Tuan (1977))。一般的に場所とは意味が浸透した物理的空間であると定義されるが、近年では分析を加える上で必ずしも物理的な特定の場所に限定されるものではないと考えられている。範囲、有形性、象徴性のいずれかを少なくとも含む多様な対象を場所として捉えることができる (Low and Altman (1992), Hidalgo and Hernandez (2001))。

場所に対して個人や集団が評価する価値には、資源としての経済的価値をはじめとする道具的 (instrumental) 価値以外にも、場所への帰属に関する感情、愛着、美、スピリチュアリティなどの非接触的 (intangible) 価値が含まれる。例えば、個人が自らの中心となる場所としてのホーム (home) を定義する上で、その言葉が示す内容の曖昧さが明らかとなっている。ホームには物理的場所のみならず、感情的経験、社会関係、記憶、文化的シンボルなどの多面的な意味があると考えられている (Cheng, Kruger and Daniels (2003))。

また、場所を分析するアプローチには、おもに記述 (descriptive) アプローチ、社会構成 (social constructionist) アプローチ、現象 (phenomenological) アプローチの異なる3つの方法がある。記述アプローチは、ある場所の持つ特異性に着目して表面的に記述する方法である。社会構成アプローチは、ある場所の特異性に注目しながらも根底にある社会的要因や社会的プロセスを重視する方法である。現象アプローチは、ある場所の属性や特異性よりも場所の中における個人の経験に重点をおく分析方法である (Cresswell (2015))。これらのアプローチは独立して存在するのではなく、場所の特異性への注目の程度という点から分類される。

場所は物質 (materiality)、意味 (meaning)、行動 (practice) の集合であり、これらの複雑な組み合わせによって各所にユニークな場所が形成されると考えられる (Cresswell (2019))。集合の性質を詳しく分析する際に有効な軸として2つの軸がある。第1の軸は「物質 (material) - 表現 (expressive)」の役割に関するものであり、場所の物質的要素と場所の意味のいずれを重視するかの軸である。第2の軸は「領域化 (territorializing) - 非領域化 (deterritorializing)」の力の方向性に関するものであり、時間の経過にともなって場所のアイデンティティを安定化、不安定化のいずれの方向に変化させる傾向があるかについての軸である。ケーススタディから得られた示唆として、場所は垂直軸と水平軸から認識できる。水平軸は周囲の場所との関係性による当該場所の定義である。場所はオープンな空間であり、周辺の影響を受けて

形成される。この側面が強い場合、周囲とのバウンダリは曖昧となり、周辺地域との差別化が生じにくくなると考えられる。さらに、水平軸は当該場所に大きな変化をもたらす要因となる。これに対して、垂直軸は土着性 (rootedness) および帰属性 (belonging) に象徴される場所との関わりの深さである。他の場所と比較した時の当該場所の特異性が強調される。場所の変化という観点では、変化の速度を低下させる要素になりうる。Cresswell (2019) の研究では、水平、垂直の一方を強調するのではなく両軸から場所を統合的に理解する必要があるとしている。

場所をとらえる際には、一般的な「場所 (place)」以外にも「場所の感覚 (sense of place, 以下ではSOPと略する)」、「場所アタッチメント (place attachment, 以下ではPAと略する)」、「場所アイデンティティ (place identity, 以下ではPIと略する)」、「場所依存性 (place dependence, 以下ではPDと略する)」、「場所の意味 (place meaning, 以下ではPMと略する)」など、場所の持つ一部の特性に焦点を当てた複数の概念が分析の対象となってきた。詳細な分析や考察を加える上で、これらの各概念について相互の関係性を理解しておくことで不必要な混乱を防ぐことができる。

まず、個人や集団の活動の意義を理解する上で、「場所」は必要かつ重要な構成要素となる。あらゆる活動は特定の場所、あるいは少なくとも特定のタイプの場所でおこなわれるのが普通であり、その特定の場所をベースに個人や集団の相互作用が形成される。したがって、人、物理的環境、社会的な相互作用は、人と場所のつながりについて考察する上で3つの不可欠な要素である。

一般的に「場所」は非常に捉えにくい概念である。場所は個人や集団の様々な活動の背景に存在する要素であり、それ自体が研究対象にならない場合には明確な定義を必要としないことが一つの原因である。さらに、場所をめぐる研究は複数の学問分野において独自に発展してきた経緯がある。この分野はエコロジーをはじめとして、人文地理学、都市計画論、コミュニティ研究、ランドスケープ論、建築などの多岐にわたっており、それぞれの研究テーマにしたがって場所を定義してきたため、この意味でも統一性を欠く状況になっている。

先述のように、場所を通じて得られる一部の心理的側面に焦点を当てるおもな概念には、「場所の感覚 (SOP)」、「場所アタッチメント (PA)」、「場所の意味 (PM)」などがあり、これらの用語は類似しているが、場所の持つ異なる側面を強調した概念であり、明確に使い分けることで場所に対する議論の整理や深い洞察を可能にする。ただし、これまでの研究からもわかるように互いに排他的な用語ではなく、少なくとも実証的には重複や補完性を持つ概念であることには注意が必要である。以下ではそれぞれの概念について簡単な整理を試みる。

2.2 PMとその他の概念

2.2.1 SOP

SOPとは「個人またはグループが特定の場所と関連付ける意味、信念、感情の集合」である (Williams and Stewart (1998))。この研究では、SOPの一部を構成するPMは、個人のマインド、共有文化、社会实践の中で能動的、継続的に構築、再構築されるものとしている。SOPとその他の概念の関係性についてであるが、SOPは個人の場所に対する一般的な認知を指し、これよりも狭い概念としてPMやPAを位置づけることが妥当である (Stedman (2002))。なお、PMとPAの関係性としてはPMをベースにPAが成立していると考えられる。PMは人と場所が結びついている理由であり、PAは結びつきの強さの度合いを示している。また、Hummon (1992)によると、SOPとは個人や集団が空間的環境に対して付与する意味であり、場所に対する解釈的知覚と感情的反応を含んでいる。SOPはPMおよびPAを加えたものであって、すなわちPMやPAよりも広い概念であると定義しており、Stedman (2002)と類似した定義となっている。

さらに、Jorgensen and Stedman (2001, 2006)は、SOPは信念、感情、行動の3つの要素から構成され、各要素はそれぞれPI、PA、PDに対応していると考えて実証分析をおこなっている。この結果、3要素モデルは支持され、特に3つの要素のうち感情的な要素であるPAが大きな役割を果たすことを明らかにした。SOPは場所の物理的特性とは異なり主観的で捉えにくい概念であるとされるが、そのような状況においてSOPの構成要素を明確にした点でこの研究の意義は大きいと言える。

SOPの定義をめぐるこれまでの経緯としては、SOPは1970年代において一般的になったが、初期には現象学のアプローチをもとに静的、安定的な対象として理解されていた。1980年代に入ってより批判主義、社会構築主義の観点から周囲との関係性の中で動的なものとして捉えられるようになった (Raymond et al. (2021))。

SOPは社会における個人の移動性の高まりの影響を受けるとされているが、移動性の高まりがSOPの形成に対してどのように作用するかについては論争がある。マスコミュニケーションの発達、大企業の進出、政府の中央集権化、ツーリズムの浸透、高速道路や鉄道建設など、移動性 (mobility) が高まる現象によって地域間の差異が小さくなりSOPの喪失が起こっているとする見解がある一方で (Relph (1976))、移動性の高まりやグローバル化はSOPを高めるとの指摘もある (Heise (2008))。

SOPの構築は、個人の生活基盤の提供、自然バランスの維持、審美的機能、経済価値と並んで生物多様性の確保によってもたらされるおもな便益のひとつであるとされる (Buijs et al. (2008))。これらの生物多様性の便益、および自然属性、人間-自然の関係性が個人の生態系マネジメントに対する一般的な見解、結果として特定の生態系マネジメント方法に対す

る態度を決定する。したがって、生態系の科学的側面のみならず、個人が持つ過去の経験、知識、社会的文脈のすべてが生態系マネジメントの社会的表象 (social representation) を形成することになる。

2.2.2 PAおよびその構成要素としてのPI, PD

PAの構成要素としては諸説があるが、これまでの理論および実証研究をもとにした有力な見解は、場所アイデンティティ (PI) および場所依存性 (PD) の2つの要素から成り立っているとする考え方である (Williams and Vaske (2003))。PAは感情的側面を示す概念であるとする主張もあるが (Relph (1976))、上記の見解にもとづくPAには認知的要素としてのPD、感情的要素としてのPIが含まれ、認知的側面と感情的側面の両方を示す概念であると考えることができる。PAの定義には現在においても異なる見解が混在していると言えるために注意が必要である。

PAの構成要素であるPDは個人による場所への依存性を意味するが、この依存性は個人が特定の活動に関連して実在する場所に対してニーズを持つために生じる。ある具体的な場所がこの特定のニーズを果たす上で機能的能力を発揮する。PAのもうひとつの構成要素であるPIは個人もしくは社会レベルにおける自己アイデンティティの形成に貢献する物理的世界についての認識である (Proshansky, Fabian and Kaminoff (1983))。PIは個人のアイデンティティ形成における一局面として捉えることができる。Twigger-Ross and Uzzell (1996) は、アイデンティティ・プロセス理論をベースとしたBreakwell (1992) のモデルを用いて、個人と場所の関連性について分析している。この研究では、個人の行動は独自性 (distinctiveness)、継続性 (continuity)、自尊心 (self-esteem)、自己効力感 (self-efficacy) の4つのアイデンティティ原則にもとづいて実行されるとの考えから、これらの各要素と行動とのつながりを実証している。ここで、独自性とは特有の個人でありたいとする欲求であるが、個人は場所を自己参照のために使うことで他人に対して自己の独自性を提示する性質がある。継続性とは、異なる時間や場面を横断して自己概念を継続させることであるが、場所参照継続性 (place-referent continuity) と場所適合継続性 (place-congruent continuity) から成り立っている。このうち、場所参照継続性は場所の特性にもとづいた継続性であり、何らかの類似した属性を持つ異なる場所の間で移転が可能である。一方で、場所適合継続性は過去における特定の経験にもとづいている継続性であるため、異なる場所への移転はできないと考えられる。自尊心は、自己価値の感情 (feelings of self-worth) にもとづいて自己をプラスに評価することであるが、場所に関わる分析においては、例えば個人が歴史や美しい風景があるとして知られる場所に居住することで得られる自己評価の向上がこれに当たる。このプラスの感情は場所自体に対するプラスの評価とは異なる。最後に自己効力感は、自己が特定の環境においてある

タスクを遂行する能力があると考える信念である。これらの4つの要素の組み合わせをもとに、場所独自のPIが形成される。

2.3 PM

各研究やフィールドにおいて、PAとPMはそれぞれ別の用語として発展してきたが、両者の厳密な関係性については詳細な研究対象となっていないことが指摘されている。Wynveen, Kyle and Sutton (2012) では、PAとPMは類似しており単に手法上の違いを示しているに過ぎないと考えている。この研究では先行研究を通してPAとPMが次のように解釈されている。つまり、PAは主として人と場所のつながりの強さを示すものであるが、その構成要素であるPIやPDなどを通して同時に抽象的な価値観を指す概念でもあるとしている。一方で、PMは場所に対する認知もしくは評価的信念であり、個人の場所に対する価値や意味を反映するものである (Stedman (2002))。この研究では、オーストラリアのグレート・バリア・リーフに関する調査において、まずインタビュー手法で個人のPMを明らかにし、そのデータをもとにアンケート調査を実施している。結果として、特定のPMが認知、感情、行動上の反応につながり、PAを喚起することが明らかとなった。

PMは、人がある場所に対して付する象徴的な意味であるが、このような意味づけは時間の流れを通じて変化していくプロセスである。つまり、時間軸のある点において人が場所を構成する属性に対して接点を持って短期的に形成するものではないと考えられる。さらに、様々な個人や場所に対して共通して形成されるものではなく、異なる個人間はもちろん、同一の個人であっても異時点である場合、さらに物理的には類似した属性を持っていても異なる場所の場合、主体である人の場所に対する意味づけには多様性が生じることになる。したがって、実証分析による仮説の検証には不向きな特質を持っており、ナラティブによる要素の抽出がおこなわれるケースが見られる。場所を構成する人と他者、場所の物理的特性の3つの構成要素の多様性が複雑な組み合わせとなってPMが形成されることから、PMの形成要因を特定することは困難となり、ケーススタディをもとに様々なケースの解釈を蓄積する方法が取られている。

Gustafson (2001) はPMを捉える4つの次元として、独自性 (distinction)、評価性 (valuation)、継続性 (continuity)、変化性 (change) を挙げている。この研究では上述の Twigger-Ross and Uzzell (1996) をもとに、PMの次元はアイデンティティよりも広い範囲の要素を含むべきであると考えている。このうち、独自性については当該場所が他の場所と物理的に区別される対象であることを意味している。評価性とは、規範的な要素であり、他の場所と比較した時の当該場所に対する個人的評価を示している。継続性とは時間的次元であり、個人のライフパスもしくは場所の歴史的環境や伝統などによって付与される意味である。また、変化性と

は個人が当該場所に対して、将来に向かって能動的に付与しようとする新しい意味を指している。

米国ワイオミング州におけるインタビューデータをもとにPMについて考察したSmaldone, Harris and Sanyal (2005)では、PMの形成について考察する上で重要な要素としてライフコース、感情の探索、場所へのコミットメントの3つを抽出している。ここで、ライフコースにおける場所は、人生の時間を区切るコンテナとして機能し、個人のアイデンティティを保つ役割を持つとする側面を示している。この研究では、前述のTwigger-Ross and Uzzell (1996)による2タイプの個人と場所の関係性をもとに、アイデンティティを保つための個人と環境の連続性について分析している。すなわち、特定の場所と自己アイデンティティとの関係を指す場所参照連続性と、あるタイプの場所が持つ属性に対して連続性を見いだす場所一致連続性である。次に、感情の探索については、おもに発見 (discovery) と回復 (restoration) という一見して相反する感情を場所に求めるケースが多いことが明らかにされている。PMにおいては視点の中心となるホームの感情が重要な位置を占めることが知られている。ここでホームとは必ずしも現実の自宅という意味ではなく、ホームタウンといった日常の生活圏を指すとされているが、ホームは親近感 (familiarity) があり、個人が安心して落ち着ける場所として位置づけられており、上記の回復と深く関わる概念である。一方で、普段から慣れ親しんでいる場所の外部にある新たな場所、もしくは生活圏の中にある場所であってもその中に新たな要素を発見することにPMを見いだすとする意見も多く見られた。最後に、場所へのコミットメントについては、一般的に居住期間との正の関係が指摘されているが、この点については例外も存在するため、明確な結論が下されているとは言い難い。

最後に、von Wirth et. al (2016)ではPAとPMの関係について、PAが定量的な測定方法であるのに対して、PMは定性的なデータ収集の方法であるとして、おもにデータの収集方法に着目してその違いを考察している。2つの概念は、いずれも人と場所のつながりの全体論的 (holistic) な性質を捉える方法として位置づけている。

このように概念としてのPMについては、PAの基盤となる要素であるとの見解は一般的になっているが、具体的にPMをどのような次元から把握するかについては研究によって多様性が存在する。一般的にPIとPDの2次元から把握するPAとは異なり、PMの具体的な内容に関しては各研究の焦点に応じて柔軟に定義するのが望ましいと考える。これまでいくつかの研究があるが、明示的にPMを取り上げた例は少ないため、今後における事例の蓄積が必要とされている。

3. PMの研究動向

3.1 研究対象

近年では流通や労働、情報などの分野をはじめとするあらゆる分野でグローバル化が進んでいる。場所研究に関しても、グローバル化はそれぞれの場所において人や情報の流動性を高める影響を持っている。そこで、それぞれの場所は静的ではなく外部から独立している存在ではないこと、すなわち場所のバウンダリの曖昧性が高まっていることが、近年の研究においては強調されつつある。流動性の高い社会では一定期間内に居住者が入れ替わるために、近代化以前の社会と比較して相対的に人と特定の場所とのつながりが弱くなる傾向があり、このような傾向は場所をベースとした保全活動を阻害する可能性がある。一方で、これまでとは異なる新たなタイプの人と場所のつながりが生じているとの主張もある。リスクの概念を通して様々な場所を横断的に認識することで共通の基準を介して場所へのつながりが認識されるとする考えである。ローカルな特定の場所からの疎外、すなわち非領域化が起こり、エコロジカルな面や技術的な側面を介した場所間のつながりが生じる (Heise (2008))。このような概念にもとづくと、特定のローカルな場所は多くのネットワークで構成されている多数の場所の一つを構成していると再認識することができる。

流動性が高まる中で様々なタイプの場所に対して付与される包括的なPMについて理解を深めるためには、今後においてより多くの研究が必要であるとの指摘がある (Main (2013))。これまでの研究においては、場所のタイプとしておもに生活の中心としての自宅に焦点が当てられてきた。例えば共用する場所 (communal places) など性質の異なる場所についてはあまり研究対象になって来なかった。また、PMの研究をおこなう上ではポジティブな意味に限定して研究されたケースが多く、中立的で曖昧なPMやネガティブなPMについては理解が進んでいない。Main (2013) の研究では、ロサンゼルスに居住するおもに移民によって共用されているスペースとしてのローカルな都市公園を取り上げて、公園が持つ包括的なPMを明らかにすることを試み、結果として回復的な機能、ソーシャルスペースの提供などのポジティブなPMと、犯罪、コンフリクトなどのネガティブなPMの両方が抽出される結果となった。

次に、人々が場所に対して持つ様々なPMをどのように分類、整理するかも重要な論点となっている。Williams (2014) は、Fournier (1991) のフレームワークにもとづいて、PMを表面的な意味から深い意味まで4つの層に分類している。各層は表面的な意味から順に、(1) 内在的意味 (inherent meaning)、(2) 道具的意味 (instrumental meaning)、(3) 社会文化的意味の層 (sociocultural layer of meaning)、(4) アイデンティティ表現的意味の層 (identity-expressive layer of meaning) と呼ばれている。内在的意味とは、文化にかかわらず大半の個人が認知できる場所の物理的特質を反映した意味である。社会的に学習される意味づけではな

い生得的な主体と環境の関係であり、直観的な風景や回復環境としての場所の質などがこの例である。道具的意味とは、行動や経済に関わる目的を充足することに資する場所の物理的特質である。目的自体は主観的であるが、目的を達成するための場所が備える特質は有形であり、客観的、物理的に定義される。残る社会文化的意味およびアイデンティティ表現的意味は、PMの中でも深い意味に分類される。社会文化的意味は、日常生活において文化、歴史、地理などの文脈の中で社会的もしくは象徴的に形成される意味であり、コミュニティや社会階層など、集団のアイデンティティを形成する要素になりうる。なお、この層の意味づけは言語や社会的相互作用を通して形成されるものであり、個人内におけるプロセスではない。最後に、アイデンティティ表現的意味は、社会文化的意味と同様に社会的に形成される意味のひとつであるが、個人がプロセスの中心にある点で異なっている。個人が場所の非物理的、感情的、象徴的な側面に対して意味を見いだす状況を示している。このような場所の意味は、場所との関わり方の文脈に依存し、個人特異的な特質を持っている。以上の点をふまえると、場所に対して異なる層の意味づけが同時に存在する状況において、単一の視点や手法を通してPMの全体像を把握することは不可能であり、多元的(pluralistic)にならざるを得ない。Williams (2014) では、意味の深さに応じて、表面的な意味から順に現象学(phenomenological)、記号論(semiotic)、認知情報処理(cognitive information processing)、社会的談話(social discursive)の異なるアプローチが適切であるとしている。

3.2 形成要因

PMの形成要因を探る上でManzo (2005) は、前述のMain (2013) と同様に、PMの形成につながる過去の体験として個人にとってポジティブな体験に焦点が当てられやすいが、ネガティブな体験や曖昧な体験を含めて幅広くPMの形成要因を探るべきであるとしている。また、対象となる場所は物理的なホームに限らず、インドア、アウトドアの様々な場所やスケールを考慮すべきであるとも述べている。グラウンデッド・セオリーにもとづく調査では、場所の物理的特性よりも場所における経験の内容に意味を見いだすケースが多いことが明らかとなっている。ここで、場所をめぐる重要なテーマとして、自宅以外の一般的な場所における経験、自宅における経験、場所の意味の発展プロセスの3つを挙げている。このうち、自宅以外の一般的な場所については、個人のアイデンティティの進化、過去との仲介、安全性・危険性・所属の3つの要素が意味の形成に大きな役割を果たしていることが明らかとなっている。さらに、ひとつの場所にひとつの意味が付与されるとは限らず、複数の場所群を通して複数の意味が形成される可能性もあることから、個人が過去に関わった場所を総合的に考察する必要があるとしている。

一方で、場所の物理的特性と経験のうちいずれを重視して考察すべきかについて、Stedman

(2003) はSOPやPMに関する研究では場所の物理的特性よりも社会構成 (social construction) に重点がおかれるケースが多いため、これら2つの要素を統合したモデルの必要性を指摘している。構造方程式モデルを用いた実証分析結果をもとに、場所の物理的特性がPMを介してPAや場所の満足度 (Place Satisfaction, 以下PSと略する) に影響を与えるとする意味媒介モデル (meaning-mediated model) を提唱している。なお、この研究ではSOPがPAとPSから構成されると仮定しているが、PSはPMを介さずに場所の物理的特性から直接的な影響を受けるとしている。すなわち、SOPは物理的特性と直接的関係を持つ構成要素と、PMを介して間接的関係を持つ構成要素から成り立っていることが明らかになっている。

上記のStedman (2003) の研究と統合的な分析結果を得ているのはSmaldone, Harris and Sanyal (2008) である。この研究では、米国ワイオミング州ジャクソンホールにおける実証分析を通じ、まず場所と関わる時間の長さがPMの内容に影響を与えることを明らかにした。その上で、旅行者など場所と関わってきた時間が短い人にとっては場所の物理的特性がPMに対してもっとも大きな影響を持つ一方で、関わる時間が長くなるにつれて場所をめぐる社会的および感情的つながりが生じ、相対的にこれらの要素の重要性が上昇する。ただし、PMの形成において物理的特性が社会的つながりや感情的つながりに置き換わる訳ではなく、要素が重層的に蓄積されることで場所の持つ新しい意味が顕著になってくるのである。

Russ et al. (2015) では、ニューヨーク市においてエコロジーに限定し、ナラティブによるPMの分析をおこない、場における直接的な経験が社会的関係や自己アイデンティティを介してPMが形成されることを明らかにしている。この研究は、経験とPMの関係を明らかにしている点ではStedman (2003), Smaldone, Harris and Sanyal (2008) と共通であるが、経験とPMがPAの一部であるアイデンティティなどを介して間接的につながると考えている点では他の研究と構造が異なっていると言える。また、この研究では直接的経験の機会を持つ上での教育プログラムの重要性についても指摘している。

また、同様に経験とPMが間接的につながると考える研究例としてBleam (2018) がある。この研究では、まず、ボランティア活動などの環境活動の実践を通すことで環境ステewardとしてのPIが高まることが明らかとなっている。そして、PIの高まりがWilliams (2014) によるPMの階層のうち深いPM、すなわち社会文化的 (socio-cultural) もしくはアイデンティティ表現 (identity-expressive) の階層の形成へとつながる。これらの深いPMは特定の地理的場所を超える範囲に対するPMであり、このような事例はPMの醸成における活動実践の潜在的な影響の大きさを示唆している。

3.3 計画への適用

個人あるいは集団が持つPMを把握することの効果や実践的意義は、おもに場所の開発計

画に関する構成員の合意形成を容易にする点にあると考えられ、これまでのケーススタディにおいてもこのような意義が指摘されている。Manzo and Perkins (2006) では、PMがコミュニティのメンバー内で共有されることで当該コミュニティにおける開発計画への合意が容易になる効果があり、また個人にとって意味のある場所を保存できるメリットがあると結論づけられている。集団で共有されるPM (shared place meaning) を発見すること、あるいは各個人が持つPMの多様性を認識することが集団の意思決定を進める上での重要な要素になると主張している。

地域の森林公園に関係する個人のPMの構造について調べた Spartz and Shaw (2011) では、米国ウィスコンシン州のローカルな環境保護団体の会員に対する半構造化面接をもとに、PMは公園の利用による生態系への高い評価、逃避の場所、レクリエーションや運動の場所、知人や家族と会う場所などと関連付けられており、個人が公園に対して持つ多次元な意味が明らかにされている。このような研究は都市において高く評価される自然公園の要素を引き出して公園の計画に役立てる、また、様々なPMを持つ個人間の土地利用をめぐるコンフリクトを低減する上での重要な情報を提供するなどの利用方法があると考察されている。

また、英国における潮力エネルギー施設の建設においては、PAがプロジェクト受容に影響を与えることが明らかにされている (Devine-Wright (2011))。ただし、PAとプロジェクト受容の関係性は、より大きなPAを持つ個人がプロジェクトに高い確率で反対するという単純な関係ではないとしている。個人にとって、場所が持つ象徴的な意味と土地利用の方法が一致している場合、その個人は地域で計画されている潮力エネルギー施設のプロジェクトを受容する傾向が高まるのである。したがって、アタッチメントの大きさではなく、PAのコアを形成している多次元なPMによってプロジェクトに対する受容性は影響されることが指摘されている。

オーストラリアのタスマニア地方における森林プランテーションの開発に関する Anderson, Williams and Ford (2013) の研究では、Devine-Wright (2009) の方法にならい社会的表象理論と場所理論をもとに、PMが土地利用に関する信念に与える影響プロセスを実証的に分析した。この中で、個人が考える望ましい土地利用につながるPMの構成要素として多機能性、生産性、スチュワードシップ、保全性の4つが抽出された。個人はいずれかの要素を重視してPMを形成する傾向があり、このために社会的にPMは多様なものとなって土地利用に関するコンフリクトが生じることが明らかとなった。そして、同一の要素グループ内においては表象の共有がおこっていること、およびグループ間の大きな差異が認められたことから、PMは個人よりも集団の影響を強く受けて強化されていることが確認できた、すなわち、社会的表象理論の妥当性が検証されたとしている。なお、この研究では個人のPMを能動的に引き出すために風景写真のQ-sort、および半構造化インタビューの技法を用いている。

自然エネルギー設備に関しては、風力発電をはじめとする自然エネルギー設備の建設が景観に悪影響を及ぼす可能性があることから、地域におけるPMとの関係性の観点から調査が実施されている。Russell et al. (2020) は、米国ロードアイランド州の海岸および沖合における風力発電のプロジェクトを対象に、PMとプロジェクトに対する態度の関係を考察している。分析の結果、このプロジェクトとPMの整合性については、大半の住民は整合性があると認識しており、これがプロジェクトの高い受容につながっているとされた。また、整合性を高めるための具体的な審美的要素は調査が実施された2つの場所によってそれぞれ異なる結果となった。このことはプロジェクトの場所や事例ごとに地域住民が持つPMの内容を知ることがプロジェクトの支持を得る上で重要なプロセスとなることを示唆している。

4. おわりに

新たな自然環境の開発、あるいは都市の再開発をめぐるには、地域の構成員を中心にした開発計画の合意を達成することが難しいケースがこれまでに多く見受けられる。一般的に、開発計画では場所の持つ物理的特性のみに注目し、開発費用や客観的な便益が評価される場合が多いと考えられる。

一方で、個人は過去の経験や記憶をもとに場所に対して多様なイメージや意味を持っている。そして、それらの意味と開発が整合的である場合には開発による変化を望ましいと考える傾向が見られる。物理的特性と比較して、場所の意味はその無形性や個人間の多様性の性質により把握が難しい要素であるが、これを把握することで意味のあるランドスケープの保全を可能にし、開発に対する合意を得やすくする効果が期待できる。

そして、このような議論をふまえて、場所の感覚を基盤とした場所の保全の必要性に対する認識が高まっている。物理的特性と社会構成の統合モデルが提案されるなど、場所の意味を捉えるための方法論も精緻化されてきている。自然の保全には多様なスタイルがあるが、場所の意味や感覚をめぐる理論を自然環境保全に応用することで、人々が望む要素を多く含んだ自然を保全することが可能になると考えられる。特にPAの基盤となるPMについては、他の概念と比較してその定義、構成要素、分析のための理論フレームワークの構築、調査方法、事例の蓄積などについて課題が多く、今後の研究が必要とされている。

(成蹊大学経営学部教授)

参考文献

Anderson, N., K. Williams and R. Ford (2013) Community Perceptions of Plantation Forestry: The Association between Place Meanings and Social Representations of a Contentious Rural Land Use, *Journal of Environmental Psychology* 34, pp. 121-136.

- Bleam, R. (2018) Unbounded Place Meanings and Embodied Place Identities for Conservation Volunteers in Scottsdale, Arizona, *Journal of Environmental Psychology* 56, pp. 76-83.
- Breakwell, G. (1992) Processes of Self-evaluation: Efficacy and Estrangement, in G. Breakwell ed., *Social Psychology of Identity and the Self-concept*, Surrey University Press.
- Buijs, A., A. Fischer, D. Rink and J. Young (2008) Looking beyond Superficial Knowledge Gaps: Understanding Public Representations of Biodiversity, *The International Journal of Biodiversity Science and Management* 4, pp. 65-80.
- Cheng, A., L. Kruger and S. Daniels (2003) "Place" as an Integrating Concept in Natural Resource Politics: Propositions for a Social Science Research Agenda, *Society and Natural Resources* 16, pp. 87-104.
- Cresswell, T. (2015) *Place: An Introduction* (2nd Ed.), Wiley.
- (2019) *Maxwell Street: Writing and Thinking Place*, The University of Chicago Press.
- Devine-Wright, P. (2009) Rethinking NIMBYism: The Role of Place Attachment and Place Identity in Explaining Place-protective Action, *Journal of Community and Applied Social Psychology* 19, pp. 426-441.
- (2011) Place Attachment and Public Acceptance of Renewable Energy: A Tidal Energy Case Study, *Journal of Environmental Psychology* 31, pp. 336-343.
- Elands, B. and K. Wiersum (2001) Forestry and Rural Development in Europe: An Exploration of Socio-political Discourses, *Forest Policy and Economics* 3, pp. 5-16.
- Fournier, F. (1991) A Meaning-based Framework for the Study of Consumer-object Relations, *Advances in Consumer Research* 18, pp. 736-742.
- Gobster, P., J. Nassauer, T. Daniel and G. Fry (2007) The Shared Landscape: What Does Aesthetics Have to Do with Ecology?, *Landscape Ecology* 22, pp. 959-972.
- Gustafson, P. (2001) Meanings of Place: Everyday Experience and Theoretical Conceptualizations, *Journal of Environmental Psychology* 21, pp. 5-16.
- Heise, U. (2008) *Sense of Place and Sense of Planet: The Environmental Imagination of the Global*, Oxford University Press.
- Hidalgo, M. and B. Hernandez (2001) Place Attachment: Conceptual and Empirical Questions, *Journal of Environmental Psychology* 21, pp. 273-281.
- Hummon, D. (1992) Community Attachment: Local Sentiment and Sense of Place, in I. Altman and S. Low eds., *Place Attachment*, Springer, pp. 253-278.
- Jorgensen, B. and R. Stedman (2001) Sense of Place as an Attitude: Lakeshore Property Owners' Attitudes toward their Properties, *Journal of Environmental Psychology* 21, pp. 233-248.

- (2006) A Comparative Analysis of Predictors of Sense of Place Dimensions: Attachment to, Dependence on, and Identification with Lakeshore Properties, *Journal of Environmental Management* 79, pp. 316-327.
- Low, S. and I. Altman, (1992) Place Attachment: A Conceptual Inquiry, in I. Altman and S. Low eds., *Place Attachment*, Springer, pp. 1-12.
- Main, K. (2013) Planting Roots in Foreign Soil?: Immigrant Place Meanings in an Urban Park, *Journal of Environmental Psychology* 36, pp. 291-304.
- Manzo, L. (2005) For Better or Worse: Exploring Multiple Dimensions of Place Meaning, *Journal of Environmental Psychology* 25, pp. 67-86.
- Manzo, L. and D. Perkins (2006) Finding Common Ground: The Importance of Place Attachment to Community Participation and Planning, *Journal of Planning Literature* 20, 4, pp. 335-350.
- Proshansky, H., A. Fabian and R. Kaminoff (1983) Place-identity: Physical World Socialization of the Self, *Journal of Environmental Psychology* 3, pp. 57-83.
- Raymond, C., L. Manzo, D. Williams, A. Di Masso and T. von Wirth (2021) *Changing Senses of Place: Navigating Global Challenges*, Cambridge University Press.
- Relph (1976) *Place and Placelessness*, Pion.
- Russ, A., S. Peters, M. Krasny and R. Stedman (2015) Development of Ecological Place Meaning in New York City, *Journal of Environmental Education* 46, pp. 73-93.
- Russell, A., J. Firestone, D. Bidwell and M. Gardner (2020) Place Meaning and Consistency with Offshore Wind: An Island and Coastal Tale, *Renewable and Sustainable Energy Reviews* 132, 110044.
- Smaldone, D., C. Harris and N. Sanyal (2005) An Exploration of Place as a Process: The Case of Jackson Hole, WY, *Journal of Environmental Psychology* 25, pp. 397-414.
- (2008) The Role of Time in Developing Place Meanings, *Journal of Leisure Research* 40, 4, pp. 479-504.
- Spartz, J. and B. Shaw (2011) Place Meanings Surrounding an Urban Natural Area: A Qualitative Inquiry, *Journal of Environmental Psychology* 31, pp. 344-352.
- Stedman, R. (2002) Toward a Social Psychology of Place: Predicting Behavior from Place-based Cognitions, Attitude and Identity, *Environment and Behavior* 34, pp. 561-181.
- (2003) Is It Really Just a Social Construction?: The Contribution of the Physical Environment to Sense of Place, *Society and Natural Resources* 16, pp. 671-685.
- Tuan, Y. F. (1977) *Space and Place: The Perspective of Experience*, University of Minnesota Press.
- Twigger-Ross, C. and D. Uzzell (1996) Place and Identity Process, *Journal of Environmental*

Psychology 16, pp. 205-220.

Williams, D. (2014) Making Sense of 'Place': Reflections on Pluralism and Personality in Place Research, *Landscape and Urban Planning* 131, pp. 74-82.

Williams, D. and S. Stewart (1998) Sense of Place: An Elusive Concept that is Finding a Home in Ecosystem Management, *Journal of Forestry* 96, 5, pp. 18-23.

Williams, D. and J. Vaske (2003) The Measurement of Place Attachment: Validity and Generalizability of a Psychometric Approach, *Forest Science* 49, pp. 830-840.

von Wirth, T., A. Gret-Regamey, C. Moser and M. Stauffacher (2016) Exploring the Influence of Perceived Urban Change on Residents' Place Attachment, *Journal of Environmental Psychology* 46, pp. 67-82.

Wynveen, C., G. Kyle and S. Sutton (2012) Natural Area Visitor's Place Meaning and Place Attachment Ascribed to a Marine Setting, *Journal of Environmental Psychology* 32, pp. 287-296.